

平野宣紀校註

山家集抄

笠間書院刊

[illegible]

平野宣紀校註

山家集抄

笠間書院刊

平野宣紀（ひらの のぶのり）
明治37年2月12日，岡山に生まれる。
昭和7年3月，東洋大学卒業。
現在，東洋大学教授。
現住所：〒 299-13 千葉県富津市富津

検印省略

山 家 集 抄

昭和四十九年四月三十日 初版発行

定価 八〇〇円

校註者 平野宣紀

東京都江東区毛利二ノ七ノ五ノ八二三

発行者 池田猛雄

東京都江東区亀戸七ノ四五ノ二

印刷者 山岡景信

東京都文京区音羽一ノ二二ノ一九

製本者 手塚貞造

発行所 笠間書院

有限会社

東京都千代田区神田神保町一ノ四六
電都東京〇三二九四一〇九九六
振替口座 東京 五六〇〇二

はしがき

本書は凡例にも記しているように、大学および短期大学等における講読、演習用の教科書として編纂した。すなわち西行の『山家集』中から人口に膾炙した代表的作品を始め、勅撰集に入集した歌および西行の自歌合である御裳濯河歌合・宮河歌合の両歌合に入れられている作など三百五十首を抄出し、それぞれ簡略な頭注を施したものである。底本にはいわゆる六家集本の板本『山家集』を用いた。

わたしは数年前『山家集全釈(一)』(穂波出版社刊)を公刊した。当初四、五年の中に完成させる予定であったが、身辺いたずらに雑事に追ひ廻されて過ぎ、その上わたしの懈怠と遅筆のため未完のまま往再今日に至っている。この仕事は現在も続行中であり、いずれそれを実現する機会を得たいものと考えているが、本書はそうした作業のいわば派生的な一端といえよう。

巻頭の写真、巻末付載の西行略年譜、小倉百人一首に採られた西行の歌の諸注集成、西行に関する説話一覧、ならびに西行歌碑一覧等は何れも読解参考の便を考えての処置である。

本書をまとめるに当っては、草稿の執筆、前記参考資料作製等、今一々について触れることをしないが、すべて左記山家集研究グループ同行の分担協力によったものである。

神作光一(東洋大学文学部教授)、村松友次(東洋大学短期大学助教授)、渡辺静子(大東文化大学講師)、橘りつ(東洋大学短期大学助教授)、露木悟義(鶴見大学女子短期大学部助教授)

なお麻生松江・伊豆吏子両君にも煩わしい校正の仕事を手伝って貰った。また出版に関しては笠間書院社長池田猛雄氏のご厚情に甘えた。ともに記して深く謝意を表する。

昭和四十八年八月

平野宣紀

解 説

藤岡作太郎博士の『国文学全史平安朝篇』（明治三十八年十月一日發行）に「自然の心友——西行法師」という題で書かれている名文を今も私は忘れ得ない。

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と斉しくし、鎌倉、室町の世、「そもそも歌道において定家を難せん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」といはれし時、称讃の声また定家に譲らず、近世に至つて定家の価値いたく墜落しても、山家集の一書はなほいかなる歌人の机辺をも去らず、西行の名今に嘖々たるは、そもそも何が故ぞ。（中略）

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹き来つて、松濤すなはち鳴る、その声必ず自然を離れず。平易率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることもまた強し。時に婉曲の響あれども、ことさらに人為の巧を加へねば、天成の詩美は千歳の下いよいよ光を増して、後人をして渴仰止まざらしむ。云々。

こういう文章は戦後に生まれた若い人達には或いは魅力がないかも知れないが、わたしなどは学生時代、ことさらに暗記をするというのではなくとも、いつの間にかそらんじて、気が向くと朗々口ずさんで楽しかったものである。

藤岡博士の西行論を俟つまでもなく、西行の声価は既にその存命時にあっても広く流布していたことは『吾妻鏡』の中の頼朝との遇会の記事や頼阿の『井蛙抄』の中に出ている文覚上人との経緯を伝える説話によっても想像出来る。

『後鳥羽院御口伝』には「西行はおもしろくて、しかも心もことに深くてあはれなる、有難く出来がたきかたも共に相かねて見ゆ。生得の歌人とおぼゆ。これによりておぼろけの人のまねびなどすべき歌にあらず、不可説の上手なり。云々」とあり、順徳院の『八雲御抄』にも「凡そ中頃よりこの方は、此道にたへたる人も少し。ただ経信近くは西行があとをまなぶべし。その様は別の事にあらず。唯詞をかざらずして、ふつ／＼といひたるが聞きよきなり。」と褒めてある。また『兼載雑談』には「慈鎮、西行などは歌よみ、其他の人は歌作りなり」と定家の評したことが載っている。

その後も彼の歌に対する称讃の語は限らないが、このような天成の歌人、西行であったからこそ、時代は変遷しても、いつの歌壇にも尊敬され、国民に親炙されてきたことも亦不思議ではない。まことにこの国の文学史にあつて、後の俳聖芭蕉と並び代表的国民詩人の双璧として、その声誉を今日に持続していることも当然といえよう。

試みに勅撰集をみても、『千載集』に入集した十八首、『新古今集』の九十四首以来、後の十三代集何れも入集していないものはなく、実に総数二百六十数首に達する。また私撰集でも『夫木抄』の三百七十六首をはじめ『御裳濯和歌集』の五十三首、『万代和歌集』の四十九首、『玄玉和歌集』の四十首、『雲葉和歌集』の二十首等、枚挙に遑がない有様である。彼の作品の名声の程が明らかであろう。

一体西行の歌の特質はどこにあるのであろうか。誰もが、口を揃えてその率直、平明な表現を指摘する。たしかにそれらは佳調にして些かの凝滞もない。殊に月花の歌に至っては絶妙という外ない。又彼の歌は即物的即興的な感じの強い作が多い。たとえ題詠の作でも、写実的な傾向が濃いのである。それが自然で素朴で、読者に無碍な親愛感をもたらすともいえる。ところが時には難澁、不可解な作品に接することもある。ただそれは『新古今』の作のごとき象徴幽玄を意図した観念的、技巧的な表現のせいではない。そういう時代的影響のある非個性的な歌も勿論ある。し

かしそれより寧ろ彼が居常、道行の中にあつて何の躊躇もなく平俗の語を使用し、又他の作家のように彫心鏤骨して一首をなし、推敲商量のあげくに表出するものでなかったからではないかと思える。そして之もまた彼の歌の上の特徴の一面であつた。

西行は俗姓を佐藤義清よしかぎと称した。憲清、則清などとも書いたらしい。その生誕を明らかにしないが、『百鍊抄』第六、保延六年（一一四〇）十月十五日の条に「佐藤左兵衛尉憲清出家。年二十三、号西行法師。」とあり、又頼長の日記『台記』の康治元年三月の記事などから逆算して、八百五十余年前、鳥羽天皇の元永元年（一一一八）に生まれたとされている。『尊卑分脈』その他の系譜によつて、藤原房前の流れで、九世の祖に有名な鎮守府將軍俊藤太秀郷があることも知られる。その秀郷から六代目公清の時に佐藤姓を名乗っている。左兵衛尉で藤原氏であつたからかく用いたのであらう。その孫の檢非違使、左衛門尉の康清が彼義清の父であつた。母は監物源清経の女。今一人兄とも弟とも両説のある仲清があつた。

右によつても分るように必ずしも位階は高くはなかつたが、秀れた家系に加えて、比較的恵まれた豊かな家計の中に人となつたらしい。『台記』にも「家富」という字句が見えている。そういう風であつたから、若くから弓馬の道に精勵し、先ず徳大寺家に隨身となり、続いて鳥羽上皇の御殿に下北面の武士として仕え、彼もまた左兵衛尉になつた。彼は又蹴鞠の道に並んで歌道の才能も秀れていたの得上皇の恩頼も一しおであつたらしい。ところが既述したように保延六年の十月十五日、二十三才の若さで出家遁世を遂げてしまった。法名は円位、号を西行、又大宝房といった。

家柄といい、家計といい、才能といい、何の不平も不満もあるように思えないのに、しかも妻や四才になる一人女を残して（他に男子があつたことが『尊卑分脈』などに見える）何が彼を出家に踏切らせたのであらう。西行研究者達は

種々の意見を立てているが、(一)当時の一般的な厭離穢土、欣求淨土思想の影響、(二)歴史的政治的な時代相への忌諱、反戾、(三)同族佐藤憲康の頓死と家族の悲嘆に遭遇しての精神的打撃、四『源平盛衰記』に記す「その相手を申すも恐れある上臈女房」との失恋のため、等に原因が考えられる。ともあれ、川田順はこの問題に触れて、「義清の菩提心は一年前、二年前、或はもっと以前から、漸くに萌しつつあったのだ。云々」(『西行全集』二八頁)と強調している。確かに出離の念願をかねてから持っていたに違いないことを裏付ける歌がいくつもある。

世にあらじと思ひたちけるころ、東山にて人々寄霞述懷と云ふ事をよめる

空になる心は春の霞にて世にあらじとも思ひ立つかな

同じ心を

世をいとふ名をだにもさはとどめおきてかずならぬ身のおもひでにせむ

など『山家集』の雑の部にあるのを見てもその辺の消息が窺える。

出家後の数年は、彼は京洛の近く、鞍馬や東山や嵯峨などあちらこちらに庵居の生活が続けていた。この間、主家徳大寺家の出である待賢門院璋子の逝去にも遇うが、久安三年(一一四七)の頃彼は伊勢から関東、奥羽の大旅行に出た。齡三十才の頃である。勿論親戚の藤原秀衡を訪うことが一つの目的であつたろう。翌久安四年冬には帰洛しやがて西行の高野山時代が始まる。彼の僧侶としての修業の最も充実した時代といえる。この時期に吉野にも数年庵を結び、そして大峰修業や熊野詣など次々行っている。五十才を過ぎて、彼は中国四国の旅に出た。特に四国では、御生前格別御恩寵を蒙った崇徳院の白峰御陵に詣で、草庵を結うて滞在している。年を越えて帰庵したようで、この後伊勢在住時代は来るのである。二見の辺に居を定め、伊勢神宮の神官達に歌を教えて過ごした。曾って保元平治の乱れを高野山に在って苦々しく伝え聞いた西行は、此度は源平の相次ぐ戦を遙かに伊勢の地に知って「こは何事の争

ひぞや」と詞書に漏らし、また歌にも詠んでいる。

さて寿永二年（一一八三）には後白河法皇が俊成に『千載集』撰進の勅を下されたことを知り、西行は伊勢から自分の詠草を俊成に送った。彼の作品は前の『詞花集』には僅かに一首、しかも「読人しらず」として入集しているに過ぎないが、此度は実に十八首も入集するに至った。彼は又伊勢大神宮法楽結縁のために当代歌界の有能な歌人、俊成、慈円、寂蓮、隆信、定家、家隆等に勸進して、所謂二見百首を詠進させている。一方西行自身、十二杜奉納の祈願をたて、十二巻の各三十六番の自歌合を編んだ。自歌合という新しい形式を作ったものといえる。今日見ることの出来るのは、伊勢の内宮へ奉納のための『御裳濯河歌合』並びに外宮奉納のための『宮河歌合』の二者だけであるが、彼は前者を俊成に、後者を定家に送って各々その判を乞うたのである。この二自歌合は一面には西行の和歌観、批評眼を知る大切な手がかりとなり、他面には両判者のそれを見る好箇の資料ともなる点で見逃がすことの出来ぬものといえる。

文治二年初秋（一一八六）、西行は再度の東北行脚を企てた。すでに齡六十九才であった。これは治承四年、平重衡が焼いた東大寺の大仏殿再興の料として、重源上人との約により、沙金勸進を同族陸奥守秀衡入道に乞わんがためであった。途中鎌倉では二品頼朝と鶴岡宮島居の辺に遇い、宮中に召されて尋ねられるままに歌道のこと、弓馬の事などを答えて終夜に及んだと『吾妻鏡』の文治二年八月十五日の条にある。なお、有名な頼朝から贈られた銀作の猫を宮門の外に遊ぶ幼童に与え去った話は、実にこの翌日昼のことであった。これも『吾妻鏡』に記されている。十月十二日平泉に着。翌年まで秀衡の館に滞在、春になって帰洛、嵯峨野のあたりに在ったが、文治五年秋には河内国の弘川寺に空寂上人の徳を慕って寄遇、そこで大病でもしたらしい。『贈定家卿文』や『長秋詠草』の詞書の中にもそのことが見られる。一時はいくらか輕快になったらしいが、遂に立てず、翌建久元年（一一九〇）二月十六日未の刻、

七十三才を以って入寂した。かねて詠んでいた

願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃

の歌の詞に違わなかった。この示寂のことは『長秋詠草』『拾玉集』『拾遺愚草』などにも見ることが出来る。墓は他に説もあるが、河内国弘川寺に近世の歌人似雲によって発見されたと伝える古墳が残っている。

以上が今日知られている西行に関する大体であるが、更に巻末の略年譜を参照し、なお伊藤嘉夫、川田順、尾山篤二郎、窪田章一郎等諸氏の著書に接することにより一層委細を尽くすことが出来るであろう。

次に『山家集』について少しく述べる。

『山家集』は山家で詠んだ歌の集という意であることは言うまでもない。サンカシュウと音読するのが正しい。『山家集』が西行の自撰か他撰か、いつ頃成立したのか、明白にはし難い。ただ興味のあることは頓阿法師の『高野日記』の中に「西行上人みづから書き給へる山家集を周嗣つたへけるを、法勝寺僧坊の火の時焼侍りける、其後西行の筆につゆたがはず書かれて侍りしを見せられ給ひしなり。云々」とあって、之が『山家集』の書名の文献に見える最初だといわれ、又そういうところから『山家集』の名が南北朝時代以前に既に世に行われていたのであると考えられる。この周嗣が伝えていたと記す『山家集』は後にふれるように実は『異本山家集』とも呼ぶ『西行法師家集』であるが、その奥書にも西行上人自筆云々と見えるから、もともと西行自ら編集したものであるかも知れない。その成立について、窪田章一郎氏は西行の六十歳前後とし、「おそらく高野山に生活の本拠を置いた時期の終わりであったと思われる。それは源平の戦乱の前夜というべき頃で、時代の不安、危機を強く予感させられた頃、生涯の作品をまとめておこうという気持になったことであろう。」（『西行の研究』三四頁）といっている。

さて『山家集』には二つの系統があつて、『六家集本』と『異本山家集』に大別出来る。

『六家集本』は更に、江戸時代上梓された二冊からなる板本と、他は写本として伝わる数種に分けることが出来る。右の板本が最も一般に流布されて来たもので、本『山家集抄』の底本も元禄三年版のそれに拠っているのである。表紙は藍、題簽に六家集山家とあり、内題に山家和歌集と見える。上下巻が別冊となり、下巻は更に上下に区分している。之から想像して、もとは恐らく三冊からなっていたと思われる。上巻には四季と恋、下巻には雑の歌を集めている。歌数は全部で一五六九首、但し重出歌一首、他人の作七十六首を含んでいる。

写本は(一)旧近衛公爵家に蔵せられていたという近衛家本山家集、(二)細川幽斎の手で校合が行われた旨奥書のある玄旨本山家集、(三)小山田與清旧蔵といわれている松屋本山家集、の三種があげられる。右の中近衛家本と細川本は祖本を等しうしておるが、板本と比べてそれにはない歌が六首、それにある歌でこれにはないものが二十二首という違いがある。松屋本は今日所在不明であるが、ただ原本を校合して板本に書き入れしてあるものが現存し、これは竹柏園架蔵の古鈔残闕本と同じ奥書をもつ由であるが、その奥書に見える歌数三一二首には遙かに及ばないという。しかしこれによって他の家集、撰集などに所見のない西行の作品六十八首が見られる旨、伊藤嘉夫氏は記している(『日本古典全書山家集』二〇頁)。今は『西行全集』や『日本古典全書山家集』によってその面影を偲ぶことが出来る。

『異本山家集』の方は明治三十九年、藤岡作太郎博士によって刊行されてからその名が出たもので、『西行上人家集』などとも呼ばれている。写本も数種あるらしい。歌数は六家集本などに比べて約三分の一の五九七首しか収めていないが、六家集本に見られぬ歌が百数十首ある点で矢張り貴重な意味がある。

この他に、収めた歌数は僅か短歌二六一首、連歌二首に過ぎぬが『聞書集』と、短歌二十五首、連歌十四句のみの『聞書残集』があつて、共に『新古今集』撰進の際の資料とされたものといわれ、且つ『六家集本山家集』との間に重複のない点が注意される。なお既に『山家集』の作者について述べた部分でふれたように、西行が晩年に創始した

自撰歌合の『御裳濯河歌合』と『宮河歌合』があり、又『異本山家集』から抄出されたと覺しき『山家心中集』等がある。そして以上の諸集のどれにも見えぬ西行の歌が相当数『新古今集』や『夫木抄』その他に載っているが、それらは『西行全集』に殆ど余すところなく編纂されておるので、それに拠ることが便利である。

最後に『山家集』関係の参考文献であるが、一々あげていくと、枚挙に遑のない程であるから、ここには代表的ないくつかを挙げておく。

- ◇異本山家集——附西行論——藤岡作太郎 明治三十九年 本郷書院
- ◇山家集詳解——积固淨 明治四十四年 武蔵屋書店
- ◇西行法師全歌集 附西行法師の生涯——尾山篤二郎 昭和十三年 富山房
- ◇西行——川田順 昭和十四年 創元社
- ◇西行研究録——川田順 昭和十五年 創元社
- ◇西行全集——佐佐木信綱・川田順・伊藤嘉夫・久曾神昇 昭和十六年 文明社
- ◇西行の伝と歌——川田順 昭和十九年 創元社
- ◇日本古典全書山家集——伊藤嘉夫 昭和二十二年 朝日新聞社
- ◇西行——風巻景次郎 昭和二十三年 建設社
- ◇校註西行法師全歌集——尾山篤二郎 昭和二十七年 創元社
- ◇歌人西行——伊藤嘉夫 昭和三十一年 鷺ノ宮書房
- ◇山家集——風巻景次郎 昭和三十六年 岩波書店
- ◇西行の研究——窪田章一郎 昭和三十六年 東京堂

◇西行山家集全注解——渡部保 昭和四十六年 風間書房

◇山家集研究——斎藤清衛 昭和二年 新潮社日本文学講座

◇西行——人および作品——松浦貞俊 昭和八年 岩波講座 日本文学

◇西行——窪田章一郎 昭和二十六年 日本文学講座 河出書房

◇西行——杉山康彦 昭和二十九年 日本文学講座 東京大学出版会

◇西行法師——窪田章一郎 昭和三十五年 日本歌人講座 弘文堂

◇西行——窪田章一郎 昭和四十五年 和歌文学講座 桜楓社

凡 例

一、本書は、西行の山家集の和歌の中から三五〇首を抄出して頭注を付したもので、大学および短大の演習、講読用テキストとして編纂したものである。

一、本書の底本は、上下二冊から成る板本の「山家集」(六家集本)である。この山家集の板本は、上巻は四季と恋、下巻は雑を上下二部に分けていて、歌の総数は一五六九首である。

一、底本の翻字に当っては、次のようなことに留意した。

(1) 字体は、印刷の都合上、新字体とするが、おどり字、宛字などは底本のままとした。

(2) 仮名遣は底本のままとしたが、左記のごとく右傍(一)内に正しい歴史的仮名遣を記しておいた。

子曰してたてたる松にうへそへば(あ)ちよかさぬべき年のしるしに

(3) 送り仮名の省略されたのや読みにくい字には、右傍に(一)を付けて次のようにルビを振った。

もしはやくうらのあたりは立(たち)のかで煙あらそふ春霞かな

山のはのかすむけしきに(かな)しるき哉今朝よりやさは春の明ばの

(4) 底本には濁点が施されていないが、必要なところには濁点を付した。また、詞書が長文である場合は、読解の便をはかって適宜句読点をつけた。

(5) 明らかに底本の誤りや脱字と思われる場合でも、あえてそのまま翻字し、右傍に(ママ)または□印を付した。ただし、語釈の項において、しかるべき他の諸本を参照し、あるべき姿に復原した。

(6) 底本における一連の排列中、二首目以降から本書に採用する場合には、次のごとく詞書・題詞に()を付けた。

(例) (題しらず)

一、頭注は、次のようなことに留意した。

(1) 抄出した歌の頭に算用数字で通し番号を付けた。なお、頭注に漢数字(ヒラ数字)を用いて次項(2)のあとに示すような形で山家集の板本の通し番号(右側)、続国歌大観番号(左側)を付した。

(2) 頭注の語釈は簡略を旨とした。形式は次に示すごとく、○印を付け、―を引いて語釈をつけ、次々に追い込む。語釈の掲出にあたっては、仮名遣のみは訂正した形で掲げ、他は底本のままとした。なお、必要に応じて語釈のところで本文異同に説き及んだ。

一六五〇 立春―ひと月を二氣に分ち、一年を二十四氣に分けた一で、年初の称。太陰曆では正月とともに来るのが普通。
○よみける―「よみける歌」の体言省略。

(3) 語釈に同じ語句が既に取りあげられている場合は、↓印をもって前出の歌番号を示し、重複を省いた。

(4) 語釈に取りあげた参考歌・参照歌のうち、正統の国歌大観に存するものについては、その表記に従って引用し、国歌大観番号を付した。たとえば、

古今集卷一 春上・読人知らず「春日野の飛火の野守出で、見よ今幾日ありて若菜つみてむ」(一八)

のごとき形式である。ただし、万葉集にかぎっては、万葉仮名で記されているため、国歌大観の表記に従わず、岩波・日本古典文学大系の読み下しの表記によった。また、正統国歌大観にはいない私撰集、私家集、歌論書、歌学書および歌合せなどの歌については、それぞれの所収本文の表記に従った。

(5) 参考歌の指摘および歌一首にかかわる説明は、□印を用いて改行とした。

(6) 本書に採りあげた一首一首の歌の入集状況については、▽印を用いて改行して記した。

一、巻頭に略解題を添えた。また、底本に用いた板本の写真および西行の歌碑等写真数葉を、参考までに口絵として掲げた。

一、巻末に本書に採用抄出した歌の初句索引をつけ加えた。さらに、参考資料として、

(1) 西行の略年譜

(2) 西行に関する説話

(3) 小倉百人一首に引かれた西行の歌の古注・新注数種対照一覧の三つを付載した。

一、本書の中にしばしば引用した書名の略号は次のとおりである。

陽明文庫本—陽明文庫藏山家集（岩波古典大系本の底本）

千載十七—千載和歌集卷十七（勅撰集はみなこの形式にならう）

御裳歌合—御裳濯河歌合

家集—西行法師家集

心中集—山家心中集

御裳集—御裳濯和歌集

夫木抄十八—夫木和歌抄卷十八（私撰集はみなこの形式にならう）

自見集_下—師説自見集_下

詳解—釈固浄の増補山家集抄を翻刻した梅沢和軒の『山家集詳解』（興文館刊）